

# 第十章

## イングリッシュネス

—「南」へのノスタルジアの諸相—

石田 美穂子



ジョン・コンスタブル『麦畑』（1826年）

しかし、南のくにの 住人は、／いちばん、やさしく賢明だ。  
 たかく吼える 寄せ波から／哄笑をまなび、その幸せな瞳に  
 やどる

信仰は、たしかに、人間の妹、春の女神に

由来する、そう 女神が海をこえてくるときに。

…

松林に入ると、たしかに／サセックスの空気が かおり、

砂浜をさまようと、なつかしい／わが家が そこにある。

空には

丘陵地帯の稜線が うかびあがる、／あんなにも 気高く、

むきだしに。

——ヒレア・ベロック「南のくに」<sup>1</sup>

この詩の作者ヒレア・ベロックは、一八七〇年にバリ郊外で、婦人参政権運動家であるイギリス人の母とフランス人の父との間に生まれ、母親の庇護のもと、イングランドで育った。二十代から詩才を発揮し、オックスフォードに入学。教授職をねらったが特別研究員になれず、国会議員として短い期間活躍したのち、多才な文筆家として名声を得た人物である。この詩で練り返し表現されるようなイギリス、サセックスへの郷土愛の強さは、二重の国籍をもつ彼ゆえの屈折した心理の表れであり、国家の中央に地位を得ることに対する強い執着とも、同根の現象だといえるだろう。彼の創作の背景にある、なかば強迫的な

「イングランド人志向」は、ヴィクトリア朝後期からエドワード朝への過渡期に盛りあがりを見せた、「(善かれ悪しかれ) イングランド人は特別な存在である(はず)」という感受性と同期していた。近年では、この時代に限定された、この特殊な感受性を「イングリッシュネス」という呼び名で研究・考察するのが一般的となっている。

このベロックより十三歳年長でありながら、ヴィクトリア朝末期の文壇で認められるべく苦闘していた作家、ジョージ・ギッティングもまた、その時代の感受性と無関係ではなかった。ベロックの紀行本『ローマへの道』(一九〇二年)が人気を博した翌年、後に代表作となったギッティングの随筆集『ヘンリー・ライクロフトの私記』(以下、『私記』と略記)が出版されている。イギリスの周縁から大都市ロンドンへ居を移し、短い後半生には南欧への旅を繰り返し、フランスで客死した漂泊の作家ギッティング。彼の文化的な出自を確認することは、後期ヴィクトリア朝のイギリスの文化自体を考察することにつながるだろう。とはいえ、あらゆる思想的扇動に対して懐疑的であった彼の作品の中に、一貫した姿勢や固い信条を探そうとすると、彼の特質であるモラリスティックな揺らぎが見逃され、その魅力がだいたなしになる。そこで本章では、彼が好んだ二つの対照的な土地、「地中海世界」と「南イングランド」の表象に注目して、ギッティング自身の「イングリッシュネス」を検討してみたい。なお本稿では、「イギリス」という国名に言及するときには

イギリス連合王国を指しており、その連合王国に属しているという意識、「ブリテイッシュネス」と、イングランドという限定された地域に対して抱くルーツ意識、すなわち「イングリッシュネス」とは、明確に区別して考察している。

## 第一節 失われた「イギリス」を求めて

近年のポストコロニアル研究では、「生まれつきのイギリス人らしさ」、すなわち本質的なイングリッシュネスを意識すること自体が大英帝国の生んだ諸悪の根源であったとの議論が盛んであるが、ここではその問題には立ち入らない。そのかわりにまず、内実は不安定であった、当時のイギリス社会の構造を概観しておく必要があるようだ。ケルトの興亡、ゲルマンの侵入、ノルマンの征服……と、その歴史的成り立ちゆえに多民族国家の住人であるイギリス人には、各々が「イギリス再発見」を迫られる瞬間があった。ことに、十九世紀末社会の思想的枠組みの激変の中では、彼らは「イギリス」国民再生プログラム<sup>②</sup>に取り組まざるをえなかったのである。

ギッシングの創造した人物のなかでおそらく最も有名なのは、『私記』の語り手ヘンリー・ライクロフトだろう。彼は裕福な「退役文人」であり、ユーモアのセンスもそなえた温厚な人物である。だが、その彼をも憤慨させるもの、それはなんと、「まずい料理」である。イギリスの宿屋で「本物のチョップヤ

ステーキ」を期待できた時代は遠く過ぎ去り、やがて英国特産のエールがミュンヘンのビールにとって代わられる由々しい事態が出来するだろう、と彼は嘆く<sup>③</sup>。そして、シヨー・ウインドウに飾られた外国製のバターにいたっては、亡国の予兆にほかならない。「こんな光景に接するとイギリスの前途の容易ならざるを思つてわれわれの気持ちは暗然とする。イギリス製バターの品質低下は、わが国民の道義心の低下を物語る最悪の兆候の一つである」(「冬」第十一章)。

たかが酪農製品に対するこの大人げないリアクション、まるで人種衰退説の「モンティ・パイソン」風コント仕立てのようだが、ヴィクトリア朝独特の知的「真剣さ」(being earnest)を身上とするギッシングは大真面目であった。だが、ライクロフトは、結果的に紛争を扇動するような悲観論を嫌う点で、人種衰退論者とは一線を画している(「夏」第七章)し、また、徴兵制度を声高に叫ぶような性急な愛国主義者とも立場を異にしている(「春」第十九章)のは間違いない。では、そのライクロフトの創造者、ギッシングにとつての「イギリス」とは、どのような連想を伴うものだったのか、その背景を考察しよう。

ヴィクトリア朝最盛期の急進派議員チャールズ・ディルク卿はこう述べている——「イギリス国民が自国に対して抱く愛情の念は、単に人類愛とか祖国愛といったものより一層堅固な、ふだんは目に見えぬ心土(heart)の上に立っている。その心土とはすなわち、広く知られたところの、イギリス国民に生来

備わった徳性と力 (virtues and powers) である」(Troter 154)。この「イギリス国民に生来備わった徳性と力」という観念は、やがてエドワード朝イギリスの愛国主義者の合言葉となる。では、デイルクをはじめ多くの識者が想定していた「イギリス国民」の実体とは、一体どのようなものだったのだろうか。

イギリスは、司法の早期確立、習得が容易な言語の発達、といった好条件下で、ヨーロッパでは最も安定した国家のひとつとなり、十七世紀以降いち早く国民国家意識が確固としたものになった、と考えられてきたが、イギリス人が好むその「説」もまた、一つの虚構である (Troter 154)。その虚構化には、経済的・軍事的覇権を背景に「イングリランド」の表象を「大ブリテン」のそれにすりかえようとする、イングリランドの力が働いていた。<sup>4)</sup> スコットランドを併合して大ブリテンへ、そして一九〇〇年までには連合王国へと、規模を拡大していたイギリスにとって、国家の維持は時代を追うにつれ困難になってゆく。台頭してきた新手法の愛国主義者にとっては、歴史的伝統(王室、貴族、議員、国教会など)も、昔からの文化的一貫性を感じさせにくれる「ノスタルジア」に過ぎなかった。<sup>5)</sup>

政治的な統一が困難になるに従い、国民のあいだに一体感を煽る「文化的な縛り」の必要性が叫ばれたことは、現代でも流行の書籍やスポーツの傾向を考えれば、たやすく想像される。ヴィクトリア朝のイギリスで考案された「文化的縛り」は、大きく分けて、言語学と地理学の二分野で見られた。たとえば、

第二節で取りあげる「ことば」への関心の高まり(辞典の編纂や標準英語の制定)、そして第三節で考察する「田園のイングリランド (Rural England)」というイメーজの創造である。<sup>6)</sup> これらの分野に対して強い関心を抱いた、キプリングやライダー・ハガードと、D・H・ロレンス、E・M・フォースターら、すなわち代表的な帝国主義的作家と目される前者と、リベラルな態度で知られる後者には、意外に共通点があったことがわかる。

ギッシングといえば、文学史的には、ゾラの提唱した自然主義に対するイギリスからの回答であり、イギリス社会の制度悪に起因する人間性の喪失を見すえたりアリスト、というのが通念である。しかし、その社会派文人ギッシングが古典文学の舞台である南欧に憧れたことの意味を、現実からの逃避、あるいは当時のイギリスへの幻滅と考えるか、あるいは「イギリス」というファンタジーを守るための逆説的なアプローチだと考えるのか。いずれも読者の自由であるが、たとえば、想像力による憧憬の念の視覚化、というギッシングが得意とした技法は、ロンドンに幻滅した彼の「空想と言語的表出のレヴェルで起きた新たな代償行動」ではないかという議論は興味深い。<sup>7)</sup> そこで実際に、いくつかのギッシングの作品解釈から、彼にとつての憧れの地、「南のくに」——「南欧」と「南イングリランド」の双方——の諸相を探ってみたい。

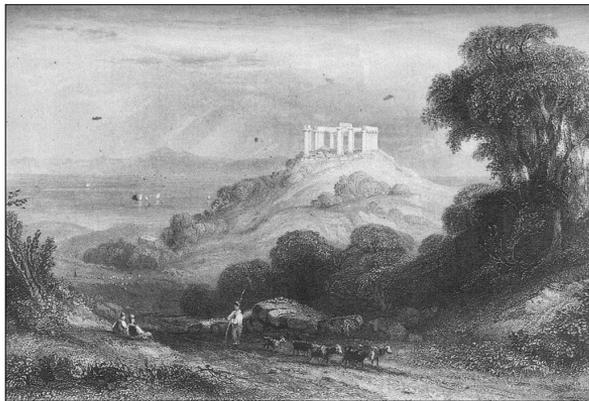
キプリングの帝国主義的偏向に対するギッシングの反感はよく知られている (Letters 7: 412)。だが、架空のアングロ・サク

ソソ文明圏再生に取り組んだキプリングと、古代ギリシャ・ローマの理想の文明圏を懐かしむギッシングとは、いずれも当時のイギリス社会のイングリッシュネスの複雑さと無縁ではない。一八九七年から九八年にかけて古典文学の「無時間世界」を漂泊したギッシングは、その間の体験と想念を紀行文『イオニア海のとおり』（一九〇一年）と幾つかのフィクションに結実させた。それとは対照的に、一九〇二年に執筆された変則的な随筆『私記』は、祖国の「限定された時空間」を記録している。ヴィクトリア女王崩御の直前、という象徴的な時期に書かれたこの二つの異質なテクスト——ギッシングにとつての祖国「イギリス」は、このフィクションとノン・フィクションとはさまに存在している。

## 第二節 「南の異界」への関心

「南」——ギッシングの「イングリッシュネス」探求のキーワードである。ギッシングが憧れた南イタリアも、ライクロフトが絶賛する南イングランドも、ともに民族のルーツである歴史の遺産の地であり、愛国主義者にとっては「くにかたち」の礎であった。自国の現状に対する不満がつのると、伝統回帰を志向する現象は古今東西、見受けられる。ギッシングがかなりマイナーな風景画家であったコプリュー・フィールディングをひいきにし、作品中で言及した（この点については第三節で詳し

く考察する）のも、彼の古代ギリシャ遺跡シリーズが気に入っていたからだと考えられる（図①）。そうした懐古趣味が愛国心の一つの表現法であるとするれば、「憧憬の念」もまた、変革を願う欲望のもう一つの相であると言えるだろう。ギッシングの思想的枠組みの中では、「マクナ・グラエキア（大ギリシャ）」と「古代アングロ・サクソン」という二つの異なる民族の文化



図① コプリュー・フィールディング『アイギナ島のミネルヴァ神殿』（1839年）

はそれぞれ、片や知的な洗練を達成した「先行の支配者」、片や素朴で好学な「北方の蛮人」として、密かに結ばれている。「イオニア海のほとり」の次の一節は、その絆を示す示唆に富んでいる。

この書「カッシオドルスの公文書」に示されている世界は、ある点では極めて高い文明のレベルを有する。つまりローマ文明であって、その法や風俗習慣がゲルマン民族の支配化になっても、かなり残っていたのだ。別の見方をするならば、野蛮人に征服され、精神の暗黒へ沈もうとしている、崩壊の世界に過ぎない。……中央権力の衰亡と、政治的混乱の発生を見ることが出来る。

(第十六章)

片や理知的な支配者を見上げ、その一方で素朴な蛮族にも惹かれる矛盾した「憧憬の念」の背景には、古代ギリシャ・ローマ植民圏を踏襲した帝国でありながら、ゲルマン民族の雄でもある、という両義的な国家イメージを内外に広めてきた、ヴァイクトリア朝のイギリスが存在している。この「大英帝国」の矛盾した民族的系譜が、ギッシングの両義的なイングリッシュネスの根幹をなしているといつてよいだろう。

前述のデイルク卿が推奨した「徳(virtue)」再評価の機運が高まる後期ヴァイクトリア朝の雰囲気的ななか、ギッシングは「大ブリテン」を離れて「大ギリシヤ」へと向かう。そこで彼

は、征服者である「野蛮人」西ゴート族の王アラリックの墓を探すが、その正確な場所はついに突きとめられずじまい。宿屋に帰ったギッシングはその夜、暗闇の中で夢想する。

……ローマ人が溶かした黄金のウィルトゥスの立像の一部も、川床の下に今もあるのかもしれない。男子の美德を象徴する立像を溶かし地金にするには西暦四一〇年という年号はまんざら不適切ではなかった。……「それ以後ローマからはすべての勇氣と榮譽が消えてしまった」から。

(第三章「アラリックの墓」)(強調は筆者による)

帝国主義文学の人気モチーフのひとつに、「古代の謎」がある。素朴な觀光旅行者なら、海外で評論家お薦めの「美学的なもの」を拝見して満足したが、探険家・歴史家たちは過去の栄華の「名残り」を見出すのが目的であった——「完全な闇がその起源を、その目的を、その歴史を覆っており、それによってその遺跡の価値はますます唯一無二のものとなった」<sup>10</sup>。古代の王の墓は、その「闇の奥」を暴かれぬからこそ「謎」として求心力を保つことができる。ところがギッシングが探し求めているゴート族の王の墓の場合、その核心部に埋められているのは、溶かされた「ウィルトゥス」(英語のvirtueの語源となったローマ神話の神)であるという。「男らしさ」という語義を持つ、この象徴的な神の像が溶かされていくイメージを脳裏に浮かべる

とき、「蛮族の反乱」(＝植民地の自治要求)により求心力の低下を暴露され、その数多い矛盾を露呈しつつあった当時の大英帝国の「徳」喪失への危機感が、読者にも鮮烈に共有されたはずである<sup>(1)</sup>。これを記した一八九七年十一月十八日という日に、ギッシングは歴史学者としての直感で祖国イギリスの「徳」の衰退を予見したといえるだろう。

ところで、『イオニア海のほとり』の特徴の一つは、ギッシングの現代イタリア観察の細やかさである。ことに彼の現地の「ことば」に対する関心の高さは、「言語(国語)の継続すなわち帝国経営の継続」と考えた、当時のイギリスの状況と深く関係している。十九世紀後期、擬似ダーウイン論的な人種退行説と歩調を合わせるように、英語の「退化」を案じる知識人層が現れ、ことばの点での伝統回帰を唱えた<sup>(2)</sup>。その一端がキプリングやG・M・ホプキンズなど、古アングロ・サクソン言語の系譜に関心を抱く作家や詩人たちである。一八五七年、一般人からの例文集という原始的な方法でスタートした(誤った用法の例文辞書)というネガティブなタイトルが象徴的な)辞書作りはやがて、一九二八年まで続く国家規模の大事業『オックスフォード・イングリッシュ・デイクシヨナリー』編纂へと拡張されてゆく<sup>(3)</sup>。また、民間の環境保護団体「ナショナル・トラスト」の設立(一八九五年)は、「ほかのいかなる場所よりも強力に国民が自分の遙かな過去を思い出す縁となるレンガや石の記録」を保護しようという、文化遺産保護の機運が高まったことを示

しているといえるだろう。穏やかな田園風景の描写を得意としたコンスタブルでさえ、ロマン派の詩に相通するような劇的な筆致で、イングランド南部に存在する巨石群遺跡「ストーンヘンジ」を描いている<sup>(4)</sup>。

一方ギッシングは、先に紹介したような「強くて素朴なゴート族」への憧れはあるものの、イギリス本国に蔓延したアング



図② ジョン・コンスタブル『ストーンヘンジ』(1835年)

ロ・サクソン言語崇拜には同調していない。あるエピソードでは、コトローネで出会った宿屋の少年の見事な敬語遣いを活写して——「文句なしに最高の文明人はこの少年だった……」「グライイエ・ア・ヴォイ、シニョーレ」(お客さま、恐縮に存知ます)と答える」(第十章)——素朴さを売りにしたアングロ・サクソンのな反理知主義を、暗に揶揄している。国籍や文明の境界を越えて無知と俗悪を嫌う、彼の知的貴族主義が、「イオニア海のほとり」の次の引用に凝縮されている。

老若を問わずカタンツァーロの代表的人物たちの交わす言葉は、同じように晩の余暇を楽しむイギリス地方人のそれよりも、遙かに程度が高い。……これは別に、素朴なアングロサクソン語と、古典語をルーツに持つイタリア語の違いではないのだ。思考の根本的差異である。この民族は生まれながらにして、理的なものに敬意を抱くが、これは典型的イギリス人には欠けている点だ。(第十三章)

ギッシングのこの思想はオーウェルに引き継がれ、彼の評論文『ライオンと一角獣』(一九四一年)に収められたエッセイ「イングランド、君たちのイングランド」の中でも、彼ら(イングランド人)は「抽象的思考を嫌悪し、哲学だの体系的『世界観』だのといったものの必要を感じない」と言わしめている。

またギッシングは、ヤギ飼いの少年に花を一本所望されて

(「何か小さいのを」)、彼の方言がひどく解りにくかったにもかかわらず、会話を試みている(第八章)。彼の方言に関するこだわりは、いわばウィリアム・ブレイク流の「一粒の砂に永遠を見る」ような世界の見方であり、永い時間のなかで培われた「ことばの豊饒」へと向けられたものである。彼に古典の素養に裏打ちされた言語能力があったからこそ、異国の「聞き慣れないことば」は「昔からの活力のあることば」として再生されたといえる。また注目すべきなのは、イタリアとイギリスの田舎の両方に、等しく「昔からの活力のあることば」を見出しているギッシングの知的公平さである(Comynplace Book 58)。これもまた、南イタリアのみを文化的に格上げすることなく、イギリスとヨーロッパの文化的な血縁関係を客観的に眺められたギッシングならではの業績である。それは当時の知識人たちの態度、すなわちアングロ・サクソン言語の派生物であるイギリス南部の方言を、現行の標準英語に比べて「より純粹で豊か」だと考えたがった知的傲慢、とは対極の、世界市民としてのギッシングの姿勢であった。

このように、ギッシングの内的世界に存在する祖国イギリスと、憧れの地「南イタリア」とのあいだには、両義的な関係がある。それをさらに具体的に観察するために、もう一つのキーワード、「田園」に注目することにした。ギッシングは近代化するイタリアの暴力的な空気に対しても警鐘をならしている——「現代のイタリアに愛国者がいるとすれば、それはただ土

地を耕し、種を蒔き、収穫をし、自分の畑のことしか知らず關心を持たぬ人のみである」（第十八章）。近年に目覚ましく進展している文化研究の領域では、こうした牧歌的田園趣味もまた、十九世紀末から二十世紀初頭のイギリスで勃興した愛国的気運の一要素であると論じられている。次の節では、美学と地理学の相関という観点から、地中海世界の愛好者ギッシングの内面では、「田園」が「イングリッシュネス」とどのように関連しているのかを考察する。

### 第三節 架空の田園、イングランド幻想

十九世紀末におこったイギリス社会の田園礼賛は、前節で述べた「帝国」イギリスの衰亡説と深い関係がある。帝国領の植民地は、都市化・工業化によって失われてゆく本国の田園の代替品と目され、おおいに期待されたが、ボーア戦争での大敗を契機にそのユートピア幻想は破綻。二十世紀初頭、人びとは再び、祖国の田園に関心を寄せた<sup>19)</sup>。そしてさまざまな学問・芸術ジャンルのなかで、「真正のイギリス (England) とはどこか?」という問いが発せられるようになった。これまでもつばら、都市生活者を自然主義的手法で観察してきたギッシングの作品と比べると、『私記』は一見、それまでの文学的な試みに対する反動のように見えるかもしれない。しかし実のところ、一八九一年から二年間イギリス東南部のデヴォンシャーに暮らして以

来、ギッシングの脳裏には常に、この地が理想郷としてあったのである。事実、晩年一九〇二年二月二十四日付のベルツへの手紙でも、「もしマダム・フルリがいなかったなら、デヴォンシャーかコーンウォールに移り住みたいところだ」(Letters 8: 36)と告白している。

ギッシングは『私記』のなかで「イギリスでもっとも注目すべきところはどこか」という問いに考えをめぐらせる（「冬」第十三章）——その答えは「イギリス南部の古い村落」である。彼によれば、南の住民はたとえ粗野でも「古い伝統的な世界の一員」であるが、北方の粗暴な人間は「やっと野蛮の域を脱したばかり」であるという。そして、こう結論づけている。

……今やあれほどはつきりと違う力や美点を示しているあの古い、真正正銘のイギリスの上に、彼ら北方人の支配の手が次第に及んでゆくのを、われわれはただ手をこまねいて見ているだけである。美しい農村が織りなすこの麗しく、広き国土も、好事家や詩人や画家以外にはあまり興味をもたれなくなってしまう。

（「冬」第十四章）（強調は筆者による）

建国神話の地である南イングランドに対するこの強い愛着は、ギッシングのアングロ・サクソン文明称揚に対する反感とは、一見矛盾してみえる。だが彼のなかでは、近代化・工業化された「非人間的で非衛生な」イングランド北部への反感と、南イ

ングランドの伝統的な「美しい農村」への愛惜の念とは、齟齬なく結びついている。それを、エキゾチックと見なされた国を好んで創作の舞台にしたキプリングと比較してみよう。彼でさえ後半生には、ヴィクトリア朝末期に流行した「人種衰退説」に対抗するべく、『ブークが丘の妖精パック』（二九〇六年）に代表される「妖精パック・シリーズ」など、イングランド史をテーマにした児童文学を重要視した。後にオーウェルは、キプリングのナシヨナリズムを「帝国主義とキプリングとサセックス」と揶揄したが、その言いかたに倣うなら、「田園偏愛とギッティングとデヴォンシャー」とでも呼ぶべき、思想的なキワードの組み合わせが誕生したのである。それを誕生させたのは、E・M・フォースターも『ハワーズ・エンド』（一九一〇年）の終わりで匂わせた「田園を脅かす近代化の暗雲」への不安であった。

本節の以下では、短篇「境遇の犠牲者」に表れているギッティングの田園観について、具体的に考察してみたい。本作品は、一種の「芸術家小説」である。偶然に、本職の画家からスケッチの才能を見出されたヒルダは内心喜び、ひととき風景画家としての栄誉の夢をみる。しかし結局は「家庭の天使」たるべきヴィクトリア朝女性の義務を優先させ、自分が描いた絵を「夫の作品」と偽って売ることで一家の収入とし、自分の芸術的野心を抹殺する。

この作品で興味深い点は、この時代に確立されていた「グラ

ストンベリ」という土地のステータスである。グラストンベリはイギリス西南部サマセット州にあり、ブリトン族の伝説上の王・アーサー王の終焉の地であると伝えられている。またここは、その昔聖杯がキリストの弟子、アリマタヤのヨセフによって運ばれてきたという聖杯伝説の地でもある。自ら「イングランド人」を自称したウィリアム・ブレイクの詩「エルサレム」（二八二〇年）——「この緑なす快きイングランドの地に聖地を建てるまで」——が今日まで、国歌と並び愛唱されていることから考えても、この土地は明らかに、イギリス人の美化された自己イメージを担ってきたのである。この短篇の執筆時期は一八九一年十一月（*Letters, 438*）であるが、ギッティングは同年一月にデヴォンシャーのエクセターに引越しており、七月ないし八月に本作品の舞台グラストンベリを実際に訪れている（*ibid.*）。この創作の経緯からも、本作品は「イングランド的なもの」に関する一種の考察であると考えるとよいだろう。

もちろん、「グラストンベリ」が舞台であるからといって、本作品を単純に、ギッティングのイングランド復興のスローガンと見ることはできない。この作品でグラストンベリの風景に愛着をしめすのは、妻ヒルダのほうだからである。興味深いことに、ヒルダという古ゲルマン語由来の名前は「闘いの乙女」という両義的な意味をもっている。そして、一般にアングロ・サクソン文化は「男くさいもの」と理解されているのに反して、グラストンベリは文明揺籃の地という「母性」をも帯びており、

ギッシングはこの土地の矛盾した、もしくは両性的な性格に着眼したに違いない。

そんな多義性とは無縁の夫、そして皮肉にもラテン語起源の姓名をもつカスルダインの関心は、もっぱら英国復興に向けられている（「子供の時からわたくしは、イギリス古代史が画家によって十分に注目されていないと痛感しておりました」）。この、愛国的なモチーフに無駄な労力を注ぐ自称画家の姿は、明らかに当時のアングロ・サクソン文化回帰ブームのパロディであり、無自覚なナシヨナリズムに対して、ギッシングが抱いていた危機感をよく表している。一八九一年のギッシングは、のちにキプリング批判をしたオーウェルに先駆けて、過剰な懐古趣味が精神の閉塞につながる危険があることを予見した、と言えるだろう。

次に重要なのは、「風景画」というジャンルと、ギッシングのイングリッシュネスとの関連である。夫カスルダインが「そのあたりのスケッチ」と侮蔑する風景画だが、この絵画ジャンルの完成度は十九世紀、一つのピークを迎えていた。特に田園を描いた水彩画は、大衆に広く愛された。「私記」にも「実に淡々たる田園風景の画を見て、心を、それも実に深く動かされたものだった」と、ナシヨナル・ギャラリーでコンスタブルの『麦畑』（一八二六年）を観たときの感動が語られている（『夏』第二章）。本短篇中にも、ターナーやミレー、デイヴィッド・コックスやコプリー・フィールディングといった実在

の画家への言及があり、彼が風景画というジャンルに対して、かなり強い関心を寄せていたことがわかる。次の引用は、かつて妻ヒルダが描いた風景画が、ある金持ちの家の客間に掛けられているのを見出した夫のセリフで、彼の決定的な敗北の瞬間である。

「……わたしは水彩画なんか全くの駄作だと思っていました。ところが、いまや、そのうちの二枚がサー・ウィリアム・バーナードの奥方のお部屋に、ミレーやターナーやその他の傑作と並んで掛かっているのですからねえ……」

この科白が当時の中産階級の嗜好をよく示している。ところが興味深いことに、『私記』にはターナーへの批判的な記述が見られるのである。

ターナーがイギリスの田園を味わったかどうか疑問だ。……われわれが美しいと呼んでいる平凡な事象の本質的な意義が、はたして彼の魂に啓示されていたかどうか、……自分はむしろパーケット・フォスターを好むと私にいったとしたら、私は微笑するだろう——しかし、その気持ちはよく分かるのである。

（『秋』第四章）

例えば、当時ナシヨナル・ギャラリーに展示しており、ギッシ

ングも目にしたであろうターナーのある絵は、ナポレオン戦争の戦時下でイギリスの農作物の豊かさを称揚つつ、歴史的建造物を配置した、さわめて愛国的なものだ。だが、ギッシングの目には、壮麗だが「真にイギリス的なものには見えない」という(図③)。一方、そのターナーの対抗馬として言及されたバークェット・フォスターとは、テニソンの詩集の挿絵などを手掛けた、ヴィクトリア朝の大衆好みのセンチメンタルな画風の画家である(図④)。ヨーロッパ、とくにイタリア絵画の伝統と



図③ J・M・W・ターナー『カブ掘り、スラウ近郊にて(ウインザー城遠景)』(1809年)

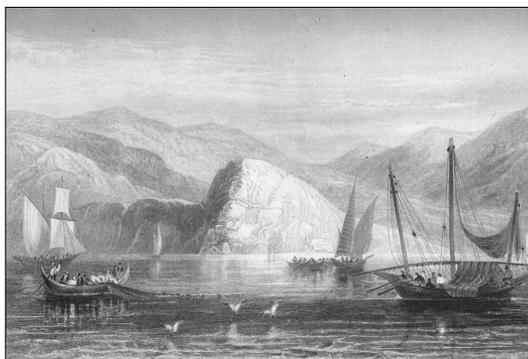
の緊密な関係を感じさせる「理知的」なターナーを斥け、「反理知的」な大衆的感傷をよしとする、ギッシングのこの両義的な絵画的嗜好は、何を意味するのだろうか。

美学と地理学との相関関係を研究するステイーヴン・ダニエルズによれば、「風景にまつわるイメーシ群は、単にさし迫る社会・経済・政治問題を映すもの、あるいはそれらの諸問題からの気晴らしではない。その風景のイメーシ群は、しばしば、社会参画と知の構築を担う、一つの強力なモードとして作用する」。このことを借りるなら、「英国風景画」というジャンルは、ヴィクトリア朝社会の「知を構築する様態」のひとつであつて、まさに「イギリス人意識の構築」を担ったのである。当時の帝国主義的思想は、現実の支配と同時に自分たちのアイデンティティ神話をも他者に押し売りし、「外国」の上に「自



図④ マイルズ・パーケット・フォスター『乳搾りの娘』(1860年)

国」への「類似と差異」の両方を示すような絵画的符号コードを押し付けたという。いわば、異文化をパロディ化した、と言つてよいだろう。ギッシングも例外ではなく、ギリシャのある遺跡で、次のような幻想を見る——「神殿の構内には草がびっしりと生い茂っている。満開のバラのしげみのみずみずしい上品な美しさ……柱列の根元あたりに茫茫と茂っている草が、一瞬私にイギリスの田園を思い出させた」（『イオニア海のほとり』第六章）。ここでは、ギッシングの理想とする「イギリスの田園」がギリ



図⑤ コプリー・フィールディング『ナクソス島』(1839年)

シャの上に投影されているのがわかる。それを裏づけるように、ギッシング好みの田園を描いた画家コンスタブルは、次のように書いた——「しかし、私は、イタリアなどより、もつと幸福に満ちた国土、心から愛してやまないわが古き英国を描くために生を享けたのだ」。

また、「境遇の犠牲者」で、画家の手本として名を挙げられるコプリー・フィールディングがギリシャに関する研究本②③に寄せた挿絵は、どう見ても英国風景画の手法でギリシャを描いたものである②④。そこには、最盛期の帝国イギリスが、古代の帝国ギリシャに対して抱く郷愁と、北方のゲルマン民族が「南のくに」に対して抱く違和感とが、混在して刻印されているようにみえる。

それにしても、ギッシングが風景画家としては二流の存在であったフィールディングを作品中に登場させていることは、きわめて意味深長である。それは、古代と現代、ギリシャとイギリス、これら双方に引き裂かれるギッシング自身の二面性の表明であり、彼の作品からにじみ出る、「アイデンティティのぶれ」の根源ではないだろうか。

#### 第四節 インングランドから／への二重のまなざし

ここまでの節で、ギッシングのイングリッシュネスには、こ

の時代特有の分裂と重層性が見られ、それが地中海世界、あるいは南イングランドの田園に投影されていることを確かめてきた。では、その両義的な性格のために、ギッシングはライクロフトと同様、現実世界に対して無力であったらうか——最終節では、この問いに対する「ノー」という答えの証として、彼の短篇「くすり指」（一八九八年）を取りあげたい。この作品は、ローマの観光ホテルを舞台に、滞在中の若い男女のあいだに起こる交流と、心理の推移を描いた佳品である。プロットを邪魔しない程度に観光地描写が挿入されており、一見映画化も可能な「安全そうな」作品に見えるが、やはりここにも複合民族国家イギリスの重層性が隠されている。本来ひとくくりに来たはずの「イングランド性」と「ブリテン性」が交差し、官能的緊張感が高まる、その特異な設定を指摘したい。

主要な登場人物は、北アイルランド人女性ケリン嬢と、イギリス人青年のライトンである。伯父のビジネス・レターを代筆するケリン嬢と、本国に恋文を書き送る同世代のライトンとのあいだには、次第に淡い友情のような絆が生まれる。しかし、語り手がケリン嬢の「アイルランドなまり」に頻繁に言及すること、<sup>27</sup>「ブリテンの辺境」である北アイルランド人のパロディ性が強調されている。一方、ライトンの出自についての情報はきわめて少ない。ケリン嬢の特徴や出自、家庭環境などは全能の語り手によって、冒頭で十全に説明されているのに対して、ライトンの説明は、ケリン嬢による一人称の語りにより切り替

えられている。

あの人は幸せにみちた人ではない。見ただけでわかる。わたしと同じように、あの人も孤独なのだ。……彼女は自分の振舞いがあまりにもありきたりだったことを思い出すと、顔が赤らんだ。そのためにあの人は、わたしを非難するだらうか。いえ、いえ、あの人はそれほど残酷な、不当な判断を下す人じゃない。<sup>28</sup>

このように、きわめて主観的なケリン嬢の観察と判断が示されるのみである。他方ライトンは、折に触れケリン嬢を「盗み見」し、彼女の外見や表情の変化を観察している。

どうやら彼女は、教養に欠けているらしく見えたが、低俗なところはなかった。……血色がもう少しよくて、目鼻だちのとげとげしさがほんのもう少し和らいだら、彼女は美人と言えたらう。ある角度から見ると、きちんと結われた黒い髪の毛と、形のいい頭と、乙女らしい胸の線が強調されて、とても上品な印象を与える。

ケリン嬢はただ「見る (see)」のに対して、彼が「見る」際には「観察する (observe)」という主体の優位を示す動詞が使われている。この視線の不平等こそが、本作品を特徴づけていると考えてよいだろう。非対称な視線は、読者に「二重のまなざ

し) (Double-Vision)を与え、その結果、不安定な物語が形成されてゆく。やがて両者の現実が衝突し——実際に、ある肉体的な傷がつけられ——押し殺されてきた女の感情の、危うい均衡が失われる。

ライトンが散歩中に誤って、同伴していたケリン嬢のくすり指を「全体重をかけて踏みつぶしてしまう」というクライマックスは、ローマの遺跡コロシウムという舞台設定からも、ケリン嬢がある種の殉教者であることを思わせる、幾重にも象徴的な場面である。ケリン嬢は「顔は真っ蒼で、鼻で荒い息をしていた。だが口を固く結んで声を出さまいとしていた。……唇が震えている。だが、それでも笑みは絶やさない」という驚くべき自制をみせる。ライトンの表面的な気づかいの結果、ケリン嬢は彼との結婚への期待を抱き、「くすり指(指輪をはめる指!)」の傷も「この栄光の都ローマで……わたしの理想の男性に求められる」吉兆だと思ひ、甘受する。そして終盤、ライトンには、本国イギリスに婚約者がいたことが判明するのである。

しかし、ケリン嬢はその献身的態度のダメ押しのように、ライトンに(フランス)金貨を一枚差し出し、本国での結婚指輪の費用の一部を約束させる。この金貨こそ、彼女がコロシウムで、ライトンに指を踏みつけられる危険を冒してまで、拾い上げようとしたものであった。しかも、ギッシングの当初のアイデアでは、ライトンは指を踏むのではなく、ナイフ

で彼女の手のひらを突き刺すことになっていたことが、ローマで執筆中に書いた友人への質問から窺える——「仮に手のひらを刺すと、どれほど血が流れるものなのでしょうか、またその応急処置の方法はありますか」(Latters, 71)。いわばケリン嬢(「北アイルランド」は、自分の身体に聖痕ステイグをつけることで、結婚指輪に出資する資格、すなわち「大ブリテンの統合」に参画する資格を買ったのである)。

想像力の欠如、真情の伴わない博愛、無自覚な暴力——ライトンの行動に表れているこれらの特徴は、大戦間・戦後にフォースターやオーウェルらが繰り返し糾弾した、大英帝国の精神的副産物である。例えば、イギリス人が好んで引用したウエリントン公爵の(言ったとされる)「ウォータールーの戦いの勝利はイートン校の運動場のおかげだ」という言葉を例に挙げ、フォースターはパブリック・スクール出身者の知的未熟に触れたし、オーウェルもこの有名なセリフをもじって、「だが、その後の緒戦はすべてそこで失われた」(「ライオンと一角獣」三五頁)と述べている。フォースター独特の諧謔によれば、「イングリッシュ特有の異様な制度」であるパブリック・スクール出身者にとつては「この言葉が歴史的に不正確で、ウエリントン公爵が言ったわけでもなく、この公爵がアイルランド人だということなどどうでもよく、彼らは「みんながみんなパブリック・スクールの卒業生でないどころかアングロ・サクソンでさえないことに気付かない」<sup>20</sup>。

一方、「イングランド人」に傷つけられても声を出さず、笑みを浮かべ続けるケリン嬢は、「大ブリテン」に呑み込まれ、イングリッシュネスを内面化させざるをえなかった、北アイルランドのアレゴリーとして読むことができるだろう。ヴィクトリア朝の文化が生んだ表象は、しばしば、「非白人（動物・怪物を含む）」が「イングランド人女性」を襲うという、支配者側に都合のよい類型に陥りがちであった。しかしギッシングはその陥穽に落ちることなく、彼の優れた観察力と、精妙な現実感覚をもって、「イングランド」の巧みな人心掌握と心理的支配を告発した。そして返す刀で、支配者の論理を内面化する敗者側の意識の問題点を暴いたのである。

だが、まるで『動物農場』（一九四五年）のラストシーンのように、だんだん、お互いに似てくる勝者と敗者とは誰か。それは、この「くすり指」という珠玉の短篇のうちに「後期ヴィクトリア朝社会」という小宇宙を封じ込めてみせた、作者ギッシング自身のふたつの顔である。オーウェルが後に喝破した、「愛国心あるいは郷土愛」と「左翼系知識人の心性」との相容れない関係<sup>(30)</sup>を地生きたギッシング。コスモポリタンとして生きることに憧れながら、晩年には、イングランドへの非理性的な愛着に苛まれた<sup>(31)</sup>（Halperin 319）ギッシング。そのような彼自身<sup>(32)</sup>の重層的な出自意識が、この短篇にもまた、避けがたく刻まれている。

## 註

- (1) ヒレア・ベロック「南のくに」『英詩の歎び』（松浦暢編訳、平凡社、二〇〇〇年）一三二―一三三頁。
- (2) David Trotter, *The English Novel in History 1895-1920* (London: Routledge, 1993) 155.
- (3) 以下、本文中の引用はすべて平井正穂訳「ヘンリー・ライクロフトの私記」（岩波文庫、一九九一年）による。
- (4) 飯田操「イングランドとイギリス」「イギリスの表象——ブリタニアとジョン・ブルを中心として」（『ネルヴァ書房、二〇〇五年）一三七―五四頁。
- (5) J. H. Granger, *Patriotisms: Britain, 1900-1939* (London: Routledge, 1986) 64.
- (6) Alan Howkins, "The Discovery of Rural England" in *Englishness, Politics and Culture 1880-1920*, ed. R. Colls and P. Dodd (London: Croom Helm, 1986) 62-68.
- (7) 松岡光治「まえがき」「ギッシングの世界」（英宝社、二〇〇三年）。
- (8) 並木幸充「イオニア海のほとり」——ギッシングの「詩と真実」『ギッシングの世界』一三〇頁。
- (9) 本文中の「イオニア海のはとり」の引用はすべて、小池滋訳『南イタリア周遊記』（岩波文庫、一九九四年）による。
- (10) James Bryce, *Impressions of South Africa*, 3rd ed. (London: Macmillan, 1899) 82.
- (11) 荻野昌利「歴史を『読む』——ヴィクトリア朝の思想と文化」（英宝社、二〇〇五年）二八七―八九頁。

- (12) ダウティは『ブリテンの夜明け』（一九〇六年）の中で「不能にして不敬な汚らわしいことばを駆除すべし、なぜならそれは明らかに我々の国民の退廃の象徴であるから」と説いた。
- (13) Simon Winchester, *The Meaning of Everything: The Story of the Oxford English Dictionary* (Oxford: Oxford UP, 2003) を参照。
- (14) “The National Trust and Public Amenities,” *Quarterly Review* 214 (1911): 157-78. 引用は Trotter 159.
- (15) 「古代の王国」というモチーフはライダー・ハガードやチャールズ・ダウティの典型的な冒険小説に見られる。また E・M・フォースターの『いと長き旅路』（一九〇七年）ではウィルトシャーの遺跡「キヤドバリー・リング」が郷土愛に根ざした愛国心をかきたてる（第三十章）。
- (16) George Orwell, *England, Your England and Other Essays* (London: Secker & Warburg, 1953) 195. 本文中の引用は川端康雄編『ライオンと一角獣』（平凡社、一九九五年）一四頁。
- (17) Max Muller, *Lectures on the Science of Language* (London: Longmans Green, 1861) 49. 言語学者マユラーは都市の言語を抽象語と呼び、経験に根ざす具体言語「方言」による国家の活性化を説いた。
- (18) Robert Colls, *Identity of England* (Oxford: Oxford UP, 2002) 134, 232.
- (19) 井野瀬久美恵「田園の再発見」『イギリス文化史入門』（昭和堂、二〇〇三年）二四二〜四六頁。
- (20) 小池滋訳『ギッシング短篇集』（岩波文庫、一九九七年）所収の「境遇の犠牲者」を参照。以下、本文中の引用はすべてこの版による。
- (21) D. H. Lawrence, *England, My England* (1915; Hammonds-worth Penguin, 1960) 8では「完璧なイギリス人種の見本」であるエグバートは妻ウィニフレッドと共に「かつて村落と自由農民を擁した古きイングランド」であるハンプシャーに農家を持つ。彼らの名はそれぞれ古サクソンの王、およびアーサー王の妃グイネヴィアのウェールズ語読みから取られている。
- (22) Ann Birmingham, *Landscape and Ideology* (Los Angeles: California UP, 1986) 197.
- (23) Stephen Daniels, introduction, *Fields of Vision: Landscape Imagery and National Identity in England and the United States* (New Jersey: Princeton UP, 1993) 8.
- (24) ニコラス・ベヴスナー『英国美術の英国性——絵画と建築にみる文化の特質』（友部直・蛭川久康訳、岩崎美術社、一九九二年）一一一頁。
- (25) Christopher Wordsworth, *Greece: Pictorial, Descriptive, and Historical* (London: W. L. Graves, 1839). 所収の図版は「アイギナ島のミネルヴァ神殿」「ナクソス島」。
- (26) 橋秀文『水彩画の歴史』（美術出版、二〇〇一年）一〇八頁。「イラストレイティッド・ロンドン・ニュース」の通信員画家などに特徴的で、描かれた風景は当時のイギリス人好みの東洋趣味であるが、絵の手法は陳腐である。
- (27) ギッシングの『因襲にとらわれた人々』（一八九〇年）の主人公ミリアム・バスクも冒頭シーンから「手紙を書くのに熱中して」いる。この小説はイギリス中産階級社会の因襲とイタリアの芸術

が象徴する精神の解放との間で揺れる若いイギリス人女性の成長を描いた点で、後のE・M・フォースターの『眺めのよい部屋』（一九〇八年）に通じるところがある。なお、この作品については石塚裕子『ヴィクトリアンの地中海』（開文社、二〇〇四年）第五章に詳細な分析がある。

(28) George Gissing, "The Ring Finger," *Cosmopolis: An International Review*, 12 vols. (1896; Tokyo: Kinokuniya Shoten, 1997) 10: 297-314. 執筆背景については小池滋訳『ギッシング短篇集』の「解説」を参照。以下、本文中の引用はすべて上記短篇集所収の「くすり指」による。

(29) E・M・フォースター『アピンジャー・ハーヴェスト』（小野寺健他訳、みすず書房、一九九五年）所収の「イギリス国民性覚え書き」四〜六頁。

(30) 川端康雄編『ライオンと一角獣』編者解説より。「彼がとりわけ批判した点は……直截簡明な英語の対極にある知識人特有の抽象的で不明瞭な言葉遣い、そして、自分を育んだイギリスの風土と伝統文化への敵意……といったものだった」三二六〜二七頁。

(31) 一九〇一年、ギッシングはH・G・ウエルズに宛てて「イングランドの草原、イングランドの路地を歩くことを夢見てきた……昼夜を問わず茹でたジャガイモやイギリスの牛肉、パイやプディングやティーケーキをむさぼり食うのを夢に見る」(Letters 8: 159)と訴えた。